



MAキックボクシング  
ワールドチャンピオンシップ  
7月26日●東京・後楽園ホール

MAウェルター級選手権。王者・伊藤隆と挑戦者・同級一位の伊達皇輝の争いは、もつれにもつれた難しい勝負となった。  
「どちらが勝っていたと思う？」  
ジャッジが下される直前、隣りにいた記者に、勝者の選択を迫られた。えーと、まてよ。すぐには答えられないな。メモを振り返る

うとしていた時に、先制攻撃……。  
「私は伊達だと思わなあ。ダウンも奪っているし……」  
ここまでハッキリと言われると、余計に迷う。確かに、3Rは完全に伊達のラウンドだった。だが、4、5Rは伊藤が完全にスタミナ切れ。伊藤のヒザ攻撃のラッシュが始まった。  
ドロローという線も強い。不思議なものでギリギリの勝負になった場合、どちらを中心に見ていたかによって印象が変わってくる。  
伊藤を中心に見ていけば、3Rにフックでダウンを奪われたが、そのラウンドでは盛り返したし、後半はヒジとヒザで圧倒した。  
伊達を中心に見ていけば、1、3R、パンチで伊藤の顔をのけ反らせたポイントは高い。そして何よりダウンを奪ったという事実が、ジャッジに大きく影響するのは明

白だった。  
そして、さらに迷ってしまうのが、団体によって、ジャッジの基準そのものに多少の違いがあること。MAキックに限っていえば、昔からパンチに比重を置いているように感じる。僕個人の意見だけではなく、選手・関係者の中でもそのことはよく口にしている。  
もちろん、ジャッジ一人ひとりの個人差はあるが、全体的にそのイメージは強い。  
逆に言えば、蹴り技はとられにくいものかもしれない。パンチは顔をのけ反らせやすいが、蹴り、とくにミドルキックで体をくぐくの字に曲げさせるのは難しい。  
音での判断は当てにできない。ある選手に言わせれば、パチン。なんて派手な音が鳴るよりも、ド

ス。と低音が響く方が、ダメーシはあるそう。  
判定をさらに掘り下げていくと、キックとムエタイの競技の違いまで追究していかねばならない。  
ここでは簡単にしか触れないが、要はムエタイを倒すためのキックを確立させるか。それともムエタイに近づくキックを樹立させるかがポイントになる。  
ムエタイの選手を裁く時は、タイの基準（ヒザ、蹴りのポイント重視）なのに、日本人同士が闘う時は、日本の基準になるのは矛盾している。  
ときおり、「タイだったら負けていた」とコメントする選手がいるが、日本を中心に考えた場合、それはおかしい。乱暴ではあるが、ここがキックが抱えるアキレス腱

といえるだろう。蹴りに重きを置くか、パンチを上位として評価していくか。すべての試合において平等に見ていかないと、選手もつまってしまう。  
話はかなり脱線したが、伊達が判定勝利を収め、伊藤やそのセコンド陣は、かなり怒りを表わしていた。ベルトが移動するのだから、それは当然のことだろう。  
伊藤の控室へ訪れる人は、口を揃えて「あれはおかしい。君が勝っているよ」と主張した。  
伊達の控室へ行けば、きつと逆の光景が見られたことに違いない。僕の結論はただ一つ。伊藤がもし勝っていたとしても、負けに等しい勝利だということ。彼はもつと高い領域にいないければならない選手なのだから。  
(松井)



○スロースターターの伊藤に対して伊達は、飛び蹴りの奇襲攻撃。「やりにくかった」と伊藤は、なかなかペースをつかめなかった  
○4、5Rは伊達完全にスタミナ切れ。伊藤のヒザ攻撃のラッシュが始まった



○判定が下った瞬間、伊藤のセコンド陣が、「何で？」と首をかしげた。取材席から見る限り、ドロローが妥当に思えたが……



○3R。いきなり伊達ダウンを奪う。右フックに見えたが本人は、「新兵器のアトミックサンダー左フックです。家の風呂で200回練習しました(笑)」と主張  
○1、3Rは劣勢に回っていた伊藤だが、左ヒジ打ちを的確に当てて持ち味を発揮した。伊達は1Rの後半、右目の上から早くも出血した



その他の試合

○4回戦では、MAVSシュートボクシングの交流戦が実現。SB風吹ジムの坪井淳浩(右)が健闘したが、MA東金ジムの東金シャノン(オーストラリア)に4R0分49秒、左ヒジ打ちをもらいTKO負け。坪井は2Rに右ヒザ蹴り、3Rにも左フック、ヒザ蹴り連打でダウンを喫したがガッツをみせた



○5回戦ライト級のランカー対決では、山木ジムの井上哲(左)が何度も右ヒジ打ちを連発。これがまともに風田陣(新潟山木)に当たり、顔部から出血。2R1分10秒、井上がTKOで下した